

石岡和己のダンス

優作

「里美が男好き!？」

私は驚きのあまり素っ頓狂な声で叫んでいた。

目の前のソファには「パロディ・サイト事件」で知り合った小幡さんが、深刻な表情で座っている。

小幡さんがこの馬車道のアパートに突然私を訪ねてきたのは、ある秋の日の午後だった。里美のことで相談がある、と言われ、彼女をソファに掛けさせるといきなり言ったのだ。「里美は男好きだ」と――。

「間違いないと思います。わたし昨日の夕方、講義が終わって大学を出て行く里美のこと尾行したんです。すごく心配だったから。そしたら……」

ごくり、と私は息を飲んだ。鼓動は速まり、体がカッと熱くなる。

確かに里美が小幡さんから男好きと誤解されているのは、「パロサイ・ホテル」の事件のときに聞いたので知っている。だが、そのことは他ならぬ里美自身から聞いた話だし、彼女はそのことをハッキリと否定したではないか。だから私もたいして気に止めずにいたのだが……。

「そしたら里美、変な雑居ビルに入っていたんです」

「へ、変なつてどんな？」

私は震える声でたずねた。これ以上聞きたくない気持ちになつてくる。

「何だか、いかがわしい感じのビルです。彼女はエレベーターに乗ったみたいだったから、わたしはすぐに追いかけていつて何階で降りるのかを階数表示のランプをつかってみたんです。」

そして里美が降りた階には何があるのか、そばにあった案内図みたいなもので見たんです。そしたら……」

小幡さんはまた肝心なところで言葉を止めた。どうせ言うのならひと思いに言つて欲しい。

「キャバレーっていうのかな? ああいうの。クラブかな? よくわかりませんが、そういうお酒が出て女の子が接待するようなお店だったんです」

まさか、そんな……。ぼくをからかっているんでしょう? そう訊ねようとしたが、小幡さんの深刻な眼差しはそれを完全に否定していた。

「で、でも店に行つてみたわけじゃないんです? 店の名前だけじゃ何とも言えないですよ?」

知らぬ間に、すがりつくような声が私の口から発せられていた。

「それはわかります!」

小幡さんは断言した。

「店の名前は忘れましたが、派手なピンク色の文字で書いてありましたからね、間違いないです」

間違いないですつて言われても……。

私は甚だしく狼狽した頭で、それでも考えた。

小幡さんには悪いがそんな話しは信じられない。信じたくない。変なバイトなんて絶対しないと決めていた里美がそんな……。だいいち何のためにそんなところで働く必要があるというのか。それを訊こうとすると、

「最近大学にもブランドものの服とかバッグでよく来るんです。間違はなくあそこで働いたお金で買ってますね」

そういう返事がかえってきた。となるとブランドものを買う金欲しさに里美はそういう店で働いているということになる。

「そんなはずないよ、ぼくは里美ちゃんがそんな高そうな服着てるのを見たことないし、そんなことするとは思えない」

その点については自信があったのでわりあい強い口調で言った。

「ちっ、ちっ、石岡先生は騙されているんです！ 里美はそういうお店で働いているから、簡単なんです。石岡先生を騙すのくらい、朝飯前なんです」

驚いた。舌打ちの仕方がまるで御手洗だ。そう言えば里美が小幡さんのことを女の御手洗だとか言っていたような気がする。

しかし、もしも里美が私を騙していたとしても、そのことで彼女にいったい何の得があるというのだろうか。どうも小幡さんの言うことはよくわからない。

「それに、それだけじゃないんです。わたしが見たのは」

怪訝そうな私の様子を察したのか、説得するように小幡さんは言った。

「あ……、でも、やっぱり止めておきます。石岡先生がショック受けるといけなから」

「そ、そんな、言いかけてやめないでよ」

思わずつり込まれてしまった。女御手洗さんは話術も巧みだ。

「じゃあ言いましょうか？」

小幡さんはぐいっとソファから身を乗り出して言った。まっすぐな眼で私を射抜くように見つめている。その有無をいわせぬ迫力に私は気圧され、ただこくと頷くしかできなかった。

「わたしずっとそのビルを見張っていたんです。そうしたら、深夜の零時頃、里美が出てきて……」

「ちょっと待って、深夜って君、夕方からずっと見張ってたの？」

「そうですよ」

おかしなこと訊くなあ、と言ったふうに小幡さんは頷いた。何時間も外で待っていたのだろうか。たいした忍耐力

だ。探偵に向いているかもしれない。ますます御手洗っぽく見えてくる。

「とにかく！ 里美が男と出てきたんです！ そして夜の街に消えていったんです！」

「えーっ！」

「だから言ったでしょう、里美は男好きだって」

小幡さんはそう言うのと勝ち誇ったようにニコリと笑った。魅力的だった。

そんな馬鹿な！ 里美に限ってそんな破廉恥なことはあり得ない。

それとも最近の子は、そういうことに対して抵抗がないのか。コンビニでバイトするような感覚でしかないのか。

いや、そうじゃない。少なくとも私の見てきた里美はそんなふうじゃない。やはり何かの間違いだ。私を頼って横浜までやって来た里美を、私が信じてやれなくてどうするとかいうのか。

だが——。と、ふいに思った。もしも、里美の働く理由が、小幡さんの言うような男好きだとかブランド品を買うためとかじゃなく、学費や生活費を稼ぐためだとしたら——。

しんと青ざめた感覚が私をとらえた。

それなら、あり得るかもしれないかった。あの龍臥亭の事件のせいで里美の家は、私の想像以上に経済的に追い込まれていたのかもしれない。そうだとすると都会の大学の娘を通わせる、それは大変なことだろう。ひよつとするとセリトスに通うこと自体が親から反対されていたのかもしれない。だが、都会生活に憧れていた里美は、あの性格だからそんな反対を押し切って横浜に来たのだ。お金のことは自分で何とかする、などとたんかを切って上京してきたのかもしれない。きつとそうだ。その結果、司法試験で忙しい里美は、短時間で高収入を得る必要に駆られあんなバイトを……。

だが、それならなぜそのことを私に隠していたのだろうか。相談してくれば学費云々ならいくらでも用立てたの

に。結局私はあてにされていないということなのか。それに店から男と出てきたという話しもある……。わからない。里美には私の知らないもうひとつの顔があるとでもいうのか。私はひとり煩悶を繰り返していた。

気がつけば小幡さんが心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「大丈夫ですか？ 石岡先生」

「う、うん、ちょっと驚いたけどね」

本当はちよつとどころじゃないのだが、若い女性の手前、あたふたと取り乱すことも出来ない。何とか平静をよそおって言った。

「でも、それも今夜で終わりです」

小幡さんが言った。

「え？ どうして？」

「決まっているじゃないですか、わたし達が里美を止めるからです」

「いったいどうやって？」

「男と一緒に現場を押さえて約束させるんですよ。もうこんなことしないように。里美がだめになっちゃうそのままに」

小幡さんは信念と自信に満ちた表情で言った。

里美がだめになる……。それが意味することがどういうことか、はつきりとはわからなかったけれど、派手な化粧で煙草を吸いながら「おいイシオカ」と私を呼び捨てる里美の姿が一瞬思い浮かび、背筋が冷えた。

小幡さんの言うことが本当にしろ勘違いにしろ、とにかくいま私が里美に会って話しをしなければならぬ状況に

置かれていることは確かかなようだった。

しかしだからといって小幡さんの言うように現場を押さえるなんていうのは乱暴すぎる方法のような気もする。

「あの……、小幡さん、ほかに方法はないのかな……」

恐る恐る言ってみた。

「ないです！」

小幡さんはまた断言した。

「里美を直接問いただしたって、否定されたらそれまでですからね。現場を押さえるのが一番なんです」

そう言われればそんな気になってくる。私のこの流されやすい性格は死ぬまで直らないらしい。それにちよつと小幡さんが怖かった。

「……そうだね。現場を押さえないとまずいよね」

「じゃあ今晚一緒にお店のあるところまで行ってくれますね？」

ここで「いいえ」と言う勇気が私にあらうはずがない。

私が「はい」と小さく言うとお小幡さんはホッとしたような表情をした。やはり彼女といえどひとりで行動するのは不安だったのだろう。

「——ところで、だれがいるんですか？ なんかきつきからガサゴソ音がしますけど」

小幡さんはソファに座ったまま不審そうに室内を見渡した。その音自体はかすかなものだったが、ガサゴソ動く人の気配は確かに先程からしていた。そして、それは数年前に空室になった友人の部屋から聞こえてきていることを私は知っていた。

「うん……、御手洗があるんだよ」

私はいった。

「え？」

小幡さんの驚く様を見ながら思った。今日は最悪な一日になりつつあるな、と。

御手洗がこの馬車道のアパートに舞い戻ってきたのは昨夜のことだった。

私ひとりには広すぎるこの部屋で、例によって近所で買ったコンビニ弁当を食べていると、突然ドアが開き、かれが現れたのだ。

「やあ、やあ、石岡君！ やはり日本の秋はいいね。果物は美味しいし、最高だね！」

御手洗はほとんどわめくように言いながら、両手を大きく広げたまま、ツカツカと室内に入ってきた。

私は呆気にとられ、半ばおびえたようにかれの挙動を見ていた。何しろ戻るといふ連絡は一切なく、ノックもなしに入ってきたものだから、てっきり精神異常者か何かが闖入してきたものと最初は思ってしまったのだ。

「おや？ 何を食べてるんだい、石岡君」

私の動揺をものともせず、御手洗は訊いてきた。不思議そうに私の手元を覗きこんでいる。

「何って、コンビニ弁当さ。それより、いつ日本に帰って来たんだ？ 連絡くらいしてから来てくれよ。びっくりするじゃないか」

私はそう抗議しながらも、実際は再会のよろこびを胸のうちで噛みしめていた。数年ぶりに見る友の顔は眩しいほどに快活で自信に満ちていて、素直に喜びを表現するのが悔しいほどだった。

「それじゃ意味ないよ。それよりどこかへ食事に行こう！ ちょっと時間は遅いが探せばいくらでも店はあるだろう」
やや意味不明な部分もあるが、食事に出かけるといふのは嬉しい申し出だった。ひとりでは外食も自炊もする気が起きず、最近の夕食はコンビニ弁当ばかりだったからだ。この界限のコンビニ弁当は全種類食べ尽くし、いまなら目隠しで食べてもこれはどの何々弁当だ、などの中させることができそうな気さえする。

「じゃあ、行こう。外は少し冷えるから何か羽織って来るといい」
 御手洗は妙に優しく言った。

外に出ると御手洗のいうとおり、少し寒い。

つい最近まで猛暑に喘いでいたというのに、もう秋風吹く中に立っている。時が経つのがあまりに早すぎて愕然とするほどだ。そしてその傾向は年齢を重ねるごとに顕著だった。

だが、いま私の隣には御手洗がいる。横浜の街をかれとふたり肩を並べて歩いている。それは、懐かしくて、ちょっとり照れくさくて、正直に言えば幸せな感覚があった。

知っている店を思い出したという御手洗の案内で一軒のこじんまりとしたイタリア料理屋に入った。いかにもかれが好みそうな全然気取りのない、家庭的な暖かい雰囲気のある店だった。

運ばれてきた料理をゆっくり楽しみながら私たちは互いに近況を報告し合った。御手洗は始終ご機嫌で、いま取り組んでいる研究のことや異国での生活のことを身振り手振りを交えながら、おもしろ可笑しく聞かせてくれた。私の方もポツリポツリとはあるが、仕事や生活のことを話した。その一々をかれは親身になってきいてくれ、的確なアドバイスなり、相づちをしてくれた。これまで、たまに御手洗から電話があっても、事務的な用件を言いつけるばかりで私の話など取り合ってくれなかったから、私は嬉しくてつい話し込み、それに伴ってワインの摂取量も相当なものになっていった。

「——ところで石岡君、最初部屋に入った時、あまり元気がないように見えたけど、食事なんかはちゃんと摂っているんだろかね？」

食後の紅茶を飲みながら、御手洗がふいに言った。少しトーンを落として尋ねるかれの声は真剣だ。

「うん、心配しなくても大丈夫だよ。……でもそんなにぼくは元気なさそうに見えた？」

そう言うと御手洗は黙って頷いた。私は少し驚いていた。

実は里美にも同じようなことを言われたばかりだったからだ。

あれは三週間ほど前、何ヶ月かぶりに里美と馬車道十番街で待ち合わせたときのことだ。すこし遅れてやって来た里美に「あーなんだか先生元気ないですねー、顔色悪いし、ちゃんとご飯食べてますか？」といきなり言われたのだ。

私は特に体調も悪くなかったので、そんなことを言われるとは思ってはいない、面食らい反対に訊き返した。

「え、朝も昼もちゃんと食べてるし、そんなことないと思うけど、そんな元気なささっ？」

「うん、はい、ちょっとですけれど」

里美はそう言っただけでそれ以上その話題は発展しなかったのだ、たいしたことはないのだろうと思い、忘れかけていたのだが。

しかし、久しぶりに出会ったふたりもの人間に元気がないと言われるのなら、気にするべきなのかもしれない。否定しても仕方ないが、私はもういい年齢だ。健康管理に留意すべき時はもうとっくに来ている。規則正しい生活に適度な運動、栄養バランスのいい食事、それが必要なのかもしれない……。だが、実際のところそれらを十分に満たしても元気澁刺とはいかないだろうな、と思う。

なぜならその根幹とも言える私の気力、それが日々衰えていくのを感じているからだ。

実際、毎晩コンビニ弁当を静まり返った広い部屋でもそもそと食べていると、気が滅入ってくるのは避けられない。まるで日めくりカレンダーの一枚一枚を剥がすような感覚で日々失われていく気力を感じる。外食や自炊でもすれば気が紛れていいのかもしれないが、その意欲自体がまるで湧いてこない。

ときには部屋が静かすぎるせいでこんなに気分が落ち込むのかなとも考えて、テレビをつけたりもしてみるのだけ

れど、機械の中の歓声や笑い声に妙な空々しさを感じ、かえって逆効果な気がして消してしまったりする。

そんな日々を送れば、顔色も悪くなるというものだ。たぶん私は鬱病になりかかっているのだろう。御手洗が鬱病にかかっているのは何度も見たが、まさか私にお鉢が回ってこようとは考えてもみなかったことだ。

せめて、もつと里美と会う機会が増えれば、彼女の元気をもらって少しはましになれそうな気がするのだが、彼女は司法試験の勉強で忙しくそれも叶わない。元気がないと指摘されたその時も、一時間ほど一緒にお茶を飲んだだけで彼女は慌ただしく帰ってしまいました。

この調子だと里美が私のそばから去っていくのもそう遠くないと思われる。御手洗が去り、里美が去り、冷えきった部屋に私はひとり捨て置かれるのだ。その時に私の気力はどれほど残されているのだろうか。死人のごとき容貌の私がひとり、薄暗いアパートの一室をとぼとぼとろつき回る、そんな光景が一瞬思い浮かび、ぞっとした。

「……僕がなぜ、ここに戻ってきたかわかるかい？」

御手洗が私の目をじっと見つめたずねている。すっかり酔いがまわり、いつの間にか思考に耽溺してしまっていたようだ。だが、目の前のかれはほとんど素面で、ただじっと私を見ている。その視線を受けているうちに、ひとりだけ勝手に酔っぱらい真つ赤な顔をした私が馬鹿みたいに思えてきた。浮かれているのはいつも私だけだ。里美と会っても、御手洗といっても……。

「なぜ戻ってきたかだつて？ さあ？ 全然わからないな。でも、なんにしるどうせすぐに君は向こうに帰ってしまうんだらうから、知らなくても全然差し支えないよ」

酔いにまかせて私はついそんな子供じみた憎まれ口を叩いてしまった。

だけどその時は、元気がないのはもととはといえば御手洗が私を捨ててスウェーデンなんかに行ってしまったせいじゃないか、と責めたい気持ちがあったので、そんなふうに言ってしまったのだと思う。

「確かにそうかもしれない。明後日には僕はもう日本を発たなければいけないからね……」

「そらみる」

御手洗の声は少し悲しそうに聞こえたが、私は構わなかった。

「でも、石岡君……」

「ごちゃごちゃ言つてないで飲もうよ、御手洗！ 今度会えるのは、また何年も先なんだろうからね。いまは楽しむぜ」

すっかり気が大きくなってしまっていた私は御手洗に向かってグラスを軽く持ち上げてから、残りのワインを一口に飲んだ。御手洗は少し困惑した表情のまま、それでも紅茶のカップを手に取り、それを少しだけ飲んだ。

私はそれから後もさらにグラスを重ね、やがて前後不覚に陥っていった。御手洗に抱えられるようにして馬車道を歩きながら、なおもかれに悪態をついたような気もするが、あまり憶えてない。そして御手洗がなぜ馬車道のアパートに突然戻ってきたのかも、結局わからずじまいのままだった。

翌朝、かすかに痛む頭を抱え目覚めた。枕元の時計を見ると、AM11:00。朝方、電話のベルに一度起こされたような気もするが、ぐっすり眠ることが出来、おおむね気分がいい目覚めだった。

ひとつ大きく伸びをして、ようやく思い出した。昨夜の御手洗とのやり取り。酔っていたせいだろうか、まるで夢の中の出来事のように妙に現実感がない。だが、御手洗に迷惑をかけたことは確かだ。きちんと謝らなければいけない。しかし御手洗自体が昨夜のやり取りを忘れていた可能性もあった。自分で捨てておいて僕の歯ブラシがない、と大騒ぎするような男なのだ。もし憶えていても昨夜のことを根に持つようなことは絶対にないだろう。今回ばかりはあの特殊な性格に感謝したい気分だった。

私はせいぜい腕によりをかけた朝食をつくり、御手洗を喜ばせてやろうと考えながら部屋を出た。リビングに御手洗の姿はない。長旅の疲れもあるだろうから、きっとまだ寝ているのだろう。

そう思い朝食の支度をしようとして、とつぜん不安に駆られた。まさか既にここから出て行ってしまったということはないだろうか、と。おとずれが唐突だっただけにその可能性もありそうな気がした。そう言えば御手洗の部屋はいやにシンとしている。

私は慌ててかれの部屋をノックした。返事がない。まさか——。勢い込んでドアを開けると……。なんだ、いるじゃないか。

御手洗はこちらに背を見せ、寝巻姿のままデスクの回転椅子に腰かけていた。かれの目の前には、窓があり、穏やかな秋の空が広がっている。

だが、どこか様子がおかしい。私が入室してもピクリとも反応しないし、ただ黙って外の景色を眺めているようなのだ。
「おい、御手洗君……」

私は不安を感じながらその背に呼びかけた。

「……ああ、石岡君。おはよう」

御手洗は首だけでゆっくり振り向いて、苦しそうに言った。昨夜の陽気な御手洗はその欠片もなく、そこにはただ鬱蒼とした表情のかがいた。

「どうしたんだ、御手洗君？　気分が悪いのかい？」

私は心配になって言った。御手洗は首をまげているのだけでも苦しそうだ。

「いや、時差だよ石岡君。……言ってみれば精神的なね」

「えっ？　ああ、時差惚けか。長旅の疲れが出たんだね。いま朝食を用意するからちよつと待っててよ、すぐに君の好きな……」

「すまない、石岡君。食欲があまりないんだ。だが、良ければ紅茶を一杯入れて欲しい。それだけでいいから……」
消え入りそうな声で御手洗は言う。

「わかった。でも、本当にそれだけでいいのかい？　何かぼくにしてあげられることはないのか？」

「十分だよ。ありがとう」

御手洗は力無い声でそれだけ言うのと視線を再び窓の外へと移した。

単なる時差惚けにしてはどうも様子がおかしかった。時差惚けで起こるのはせいぜい体のだるさか眠気ぐらいのもののはずである。それにしても御手洗の状態は悪すぎるように思えた。これでは、まるで鬱状態……。いや、それは早計に過ぎる。昨夜は少し肌寒かったから風邪にでもかかったのかもしれないし。まあ、ストックホルムに比べれば

たいしたことはないだろうが……。

私はあれこれ思いを巡らせながら、それでも紅茶を用意するためにひとまず部屋を出た。

十分後、御手洗はいらないと言ったが、何か少しでも食べないと体に毒だと思い、サプレーを皿に盛り、ミルクを添えた温かな紅茶と一緒にかれの部屋を再び訪れた。出たときと変わらず、御手洗は背を向けたまま窓の外を見ている。

紅茶とサプレーの乗った盆をかれのそばにそと置いた。御手洗はかすかに身じろぎしたようだが、とくに反応はない。

その場を立ち去ることも出来ず、彼の背を見つめながら、どうしようかと思案していると、

「石岡君……」

御手洗が私の方を見もせずに、ぼつりと呟いた。

「なんだい？」

御手洗の声小さすぎて聞き取りづらいので、私は身を屈めて耳を近づけた。

「……降り続ける雨は、容赦ないね。」

われわれは身を守る傘一本さえも与えられず、ただじつと雨に打たれつづけなければいけないんだ。やがて周囲に満ち満ちた雨に、身もだえし、窒息し、おぼれ死ぬその日までね」

きよんとしてしまった。意味不明の言葉だ。どういふことなのか問い質そうとも思ったが、そんな言葉を差しはさむ余地をかれの背中に全く見いだせなかった。それで、ひよっとしたら言葉の続きがあるのかと思ひ、少し待ってみたが、それは無駄な時間に終わった。

思い過ぎであつて欲しかったが、この様子からすると御手洗はやはり鬱状態にあるらしかった。しかし私はかれ

の部屋にとどまることはせず、そのままリビングに出た。いままでの経験から言うと、こういう場合はあまり御手洗の世話を焼いたり構いすぎると逆に鬱状態が悪化する可能性があるからだ。こういう時はほうっておいて出来るだけ普段通りに接するのがいいのだ。

それでもいつあの状態から回復するのかわからず、誰にもわからない。数時間であつさり立ち直ることもあれば、何ヶ月も引きずることもある。

御手洗のことは心配だったが私は取り敢えず朝食を摂ることにした。手の込んだ物を作る必要はなくなったので、買い置きのもので適当に済ませることにした。

数分後、トーストをかじりながら時計をみるともう正午近かった。もう自分が食べているのが朝食だか昼食だか何かわからない時刻だ。

朝刊を読む気もしなかつたので、食事をしながらぼんやりとかれの言った意味不明の言葉について考えていた。

「降り続ける雨」がどうのこうのと言っていたが、何のことだろう？ 別に今日も昨日も雨は降ってないが……。「潮れ死ぬ」とか言ったことを考えるとやはり何かの喩えなのだろうか。そう言えば聞き違いかと思つて、さっきは尋ねなかつたが、会話の中で御手洗が精神的な時差惚けだ、とか何とか言つたのも気にかかる。

雨と時差、何か関連があるのだろうか。

思考が行き詰まつたまま、私は壁掛け時計の秒針がチクタク音をたてるのを聞いていた。

そしてわかつた。

御手洗の言う「雨」とは時間のことだつたのだ。

これは間違ひではないだろうという確信があつた。かれの言う「雨」を時間に置き換えれば、比喩的ではあるが、意味が見て取れる。

降り続ける雨は容赦ない……、確かに御手洗の言うとおりの。われわれの人生というものは時の流れの中で無力だ。誰ひとりとして、「傘一本さえも与えられず」に時の雨にさらされ、それこそ「おぼれ死ぬ」ようにやがて来る終焉を迎える。

とすると御手洗は時間の持つ非情さについて憂いていることになる。「人生はあまりに短い！」と嘆いているのだろうか。どうも御手洗らしくない、私にはそう思えた。

「時間か、ふん！ 挑むならまだしも、脅えることにその時間を費やしてどうする？ そんなのは徒労と大きく書き込んだブラカードだよ」

そう言つて一蹴するのが、彼ではなかったか？

だが——。とも思つた。言いたくないが、われわれも年をとつたということなのかもしれない。特に御手洗のような学者タイプの人間にとつては、研究する時間はいくらあつても足りないのかもしれない。それも脳研究のようなこれから本格的に解き明かされるような謎に対して、生きていくうちに解答が得られないかもしれないと考えると御手洗は歯噛みするような思いでいるのかもしれない。

だがしかし、それにしてもなぜ今なのだ——。わざわざ北欧からやつて来て鬱状態におちいるのには、それなりのきっかけがあるはずだ。何なんだろう？ 昨夜、御手洗がやつて来てからの事を振り返ってみると、思い当たるのはただひとつだけ。レストランでのあの子供じみた憎まれ口。

だが、あれは酔つた上での言葉で、しかも単なる愚痴みたいなものだ。御手洗が気にする必要はないし、だいたいあんな事でかれが傷ついたり、鬱になつたりするはずはない——と、今までは思っていたのだが、違ふのだろうか。変わったのか？

そう言えば帰国の理由をまだ聞いてないが、もしかしてそのあたりに御手洗の鬱の原因があるのだろうか。たとえ

ば異国の地でなにか紛らわすことの出来ない哀しい出来事があつて、それを癒すための帰国だったとか。もしそうならいきなり戻つてきたわけも説明できるし、昨夜現れたときの陽気さも、何か秘めた哀しみなりがあつたからこそその反動と考えることもできる。

ひよつとすると私は酷いことを言つてしまったのかもしれない。抱きしめられなくてやつて来た子供を殴りつけるような酷いことを……。

私は煩悶を繰り返していた。

午後が過ぎ去つてゆく中、それこそ何時間も。

小幡さんが「里美が男好きだ」とやつて来たのはまさにそんな状況の時だったのだ。

これで今日が最悪な一日になるといふ予感を、私が抱いた理由をわかつていただけたかと思う。

「本当に御手洗さんが戻ってきているんですか？」

御手洗が部屋にいることを告げると小幡さんは興奮した様子で言った。

私はしまったと思った。

小幡さんがかなりの御手洗ファンだということを思い出したからだ。

「いやっ……いたらないなあと思ってただけ……で……本当はいるはずないんだけどね……」

私はしどろもどろの言い訳をする。だが、既に遅かったようだ。目を輝かした小幡さんが立ち上がり御手洗の部屋を見た。そしてすぐさま部屋のドアに駆け寄る。間取りは熟知しているようでその動きに無駄はない。

「駄目だよっ。いま具合が悪いらしいんだ」

私は慌てて小幡さんの前に立ちはだかった。ほかの時ならまだしもいま会わせるわけにはいかなかった。

鬱の原因いかんによつては小幡さんの来襲によつて御手洗が致命的なダメージを受けるかもしれないからだ。そうでなくても悪化するのでは避けられないだろう。それだけは絶対に阻止しなければならなかった。

「ひとめ見るだけです。お願い、石岡先生。ちょっとだけ」

拝むように私に両手を合わせる小幡さんの目は真剣だ。御手洗のパロディ小説を大量に集めていただけあって小幡さんの熱意はすごい。一瞬でも気を緩めれば押し切られ、御手洗の部屋になだれ込まれるのは確実と思われた。

「一瞬だけ、お願い！」

強引に私を押し退けようとする小幡さん。御手洗ファンのなかでも相当な強者と見える。苦戦は必至だ。それに相手が女性ということもあつて手荒く押し返すことも出来ない。

気がくじけそうだった。そもそも女性に頼まれると昔から断れない性格なのだ。その性格を見抜かれて無理難題を押しつけられたことなど数知れずあつた。

だが、今回ばかりはどうあつても引き下がるわけにはいかない。理由はわからないが御手洗はいま弱っている。友人としてかれを守ることが出来るのはこの場において私だけなのだ。

御手洗の部屋の前で、見せて、いや見せないの押し問答を延々続けていると、いきなりガバとドアが開いた。

「煩いな。パンダなら動物園だよ」

無然とした表情の御手洗が立っていた。いつのまにか寝巻からきちんとした外出着に着替えている。鬱病はもう治つたんだろうか。

「御手洗、もう大丈夫なのか？」

「心のことを訊いているのなら、いまだ暗れぬままさ。……だけど、僕は出掛けなければいけないんだ」

無然とした表情を崩さないまま御手洗は言った。

「出掛けるって一体どこへ？」

そう訊いた瞬間、嫌な感覚が私をとらえた。

「——えっ！ まさかさっきの小幡さんの話しに何か事件性があるっていうのか？」

全身に緊張が走った。

一見したところ事件性など何も感じられない相談から重大事件へと発展する場を、御手洗という案内人を通じてさんざん見てきた。

だから、御手洗が私と小幡さんの会話を自室で聞いていて、その会話の一端から私などには汲み取れない、危険な兆候とも言うべき何かを察知し、それを未然に防ぐべく行動を開始した。その可能性は十分ありえるように思った。

と、すると今回の場合は……！ 里美の身に危険が迫っている！？」

「違うよ。……まあ、全然関係ないってわけじゃないけど」

御手洗はそつげなく言った。

「待てよ、御手洗。関係ないわけじゃないってどういうことだ？」

「興奮しなくてもすぐにわかるよ。約束しちゃったんだから仕方ないんだ」

謎の言葉を残し、御手洗は扉の向こうに消えた。

約束だって？ 今回の帰国の理由はひよっとしてそれなのだろうか。しかしいったい誰と会うつもりなのだろうか。

御手洗がわざわざ帰国してまで会いたい人物。私に心当たりはない。それに、その人物と先ほどの話しがいったいどう関係するのだろうか。

疑問だらけで残された私は、御手洗が出て行った扉を見つめたまま、最悪な一日になりそうな予感がますます増大してきたのを感じていた。

「……行つてらっしゃいませ、御手洗さん」

両方の目がハートマークになっている小幡さんが遅すぎる見送りをした。

私と小幡さんは窓際の席に座った。ここは小幡さんの言うところの「いかがわしい街のいかがわしい喫茶店」だ。われわれがこの喫茶店にやって来たのは里美が出てきたとされるビルを見張るためだった。この窓際の席からよく見えるひっそりとした印象の建物、それが目的のビルで、小幡さんは昨夜この喫茶店で見張っていて、里美が男と出てくるのを目撃したそうだ。(外で見張っていたというのは私の早とちりだった)

「あのビルですからね」

小幡さんは念を押すように言った。

実はこの店に入る前に、私と小幡さんは問題の雑居ビルを調べていた。

これは私の強硬な主張によるものである。小幡さんが昨夜見たのは里美がビルに入るところと出るところだけだし、何階でエレベーターを降りた(彼女によれば五階だそうだ)かも、階数表示のランプを見ただけだ。単なる勘違いや見間違いの可能性もあるはずだし、そうであって欲しかった。

だが、結果はといえば、小幡さんの主張は正しかったことを証明しただけであった。案内板で見ると五階には、クラブ「M」という店が確かに存在し、それはこのビルの最上階で(エレベーターは一度も止まらなかったそうだから、同乗した里美以外の誰かが「M」のある階で降りたという可能性がなくなる)、その階には「M」しかない(たまたま同じ階にレストランがあったなどという可能性もなくなる)ことがわかったからだ。

私は時計を見た。午後八時、陽はとつくに落ち、窓越しに見る店の前の通りも夜の顔を見せている。

しかしパチンコ店やら居酒屋などがネオンをともしているばかりで、性的な目的のための店開きが目の前で行われているわけではなかった。

そのことに私は少し安心した。小幡さんはこの辺りはいかかわしい場所だから気をつけて下さいよ、とさかんに言っていたが、それほどでもなさそうである。

私はよく知らないが、いわゆる風俗店が乱立しているような場所からはずっと離れている様子だ。それに繁華街の中心地からもずれているので人通りもまばらで、比較的落ち着いた場所である。

それにしても里美を待ち伏せするにしても到着が少しはやすぎたのではないだろうか。小幡さんに言われるままに、このことやつて来たが、里美が出てきたという深夜零時まではまだ何時間もある。ここでそんな長い時間待ち続けるのは辛そうだ。

「来るのがすこしはや過ぎたんじゃないかな？」

私は疑問を口にした。

「まあ、はいのに越したことはありませんからね。……私と待つのがイヤですか？」

そういつて小幡さんはじつと私を見た。

「そんなことない。そんなつもりで言ったんじゃないよ」

私はあわてて否定する。小幡さんはなかなか美しい女性なのだが、妙に迫力があつて怖い瞬間がある。いまがそうだった。

「あ、そうそう、里美ちゃんが今日、お店にいるってどうしてわかったの？」

私は気になつていたことをたずねた。里美が出勤していなければ見張りの意味がない。

「それはですね……、ミス研の後輩に尾行させたんですよ。そういうの好きな子たくさんいますからね、面白がつてすぐやるって感じですよ」

そう言えばこの店に来る前、小幡さんの携帯電話が鳴った。おそらくそれが後輩からの連絡だったのだろう。

それにしても、部下(?)もたくさんいるようだし、小幡さんは本当に探偵のようだ。この件も私などいなくても、何とでもなりそうである。

薄情と思われるかもしれないが、私の本心はここから逃げ出してしまいたかった。小幡さんの勘違いの可能性もほとんどなくなつたいま、あのビルから里美が男と出てくるかもしれないと考えると、胸はドキドキと落ち着かなく拍動し、胃はキリキリと収縮をはじめ、手足は常に置き所がなく無意味な動きを繰り返すといった有り様で、どうにもやり切れなかった。

見張りの間中、小幡さんにいろいろ質問されたが(御手洗についてはかりだ)、とても答えられるような状態じゃない。やがて小幡さんも私のあまりの狼狽ぶりにあきれたのか、質問しなくなり、ふたりは黙つたまま窓の外を見つめるというのが、数十分も続いた。

そのときだった。

華やかな装いに身を包んだ若い女性が、「M」のある雑居ビルから、弾かれるようにして路上に飛び出してきた。女性ははしゃいだふうにして、続いて出てきたやや猫背の男性の手を引っ張っている。男性はそういうことに慣れていないのか、布製の帽子を目深にかぶり、ぎこちない様子で黙つて女性に手を引かれている。

だが私の視線はすぐにその男性から逸れ、女性の方に釘付けになった。薄暗がりでもハッキリとはわからないが、彼女はブランドものらしい襟付きの真っ白いシャツにレザーの超ミニの黒スカートを街灯りに反射させながら、とても楽しみに男性の顔を見上げ話しかけている。もう手は握つてない、などと細かいところにどうしても目がいく。

「まあ、あんなにはしゃいちゃつて」

小幡さんはその女性を見ながら忌々しそうに言った。

……ここまで来ておいてなんだが、私はまだ小幡さんの言うことを全面的に信用したわけではなかった。だいたい

小幡さんときちんと会話するのは今日がはじめてなのだ。里美と彼女が今までどんなつき合いをしてきたのかも知らないし、小幡さんがどんな人かもよく知らない。

だから、小幡さんに何を言われても、実際この目で見るまで信じられなかった。……だが、雑居ビルから出てきた女性は、まぎれもなく里美そのひとだった。

「意外にはやく現れましたね。いよいよですよ、石岡先生。すぐにここを出て、里美を追いかけましょう」

小幡さんは伝票を握りしめると、勢いよく立ち上がった。

だが、私は立ち上がるどころか、床に倒れ込みそうな気分には捕らわれていた。

もしも里美が本当にそういうお店でバイトしていたとしても、学費のために仕方なくやっついて、少しでもいいから憂いをたたえてビルから出てきたのなら、立ち上がり里美を追いかけることは出来ただろうと思う。だが、あんなふうにはしゃいで楽しそうな里美を見てしまいたいま、私に何が出来るというのだろう。あれは好きでやっているようにしか見えない。

目の前が暗くなり、気が遠くなる思いがした。私を感じた悪い予感は見事的中したわけだ。いつもそうなのだ。悪い予感ばかりが実現する……。

私は全身を虚脱感が襲う中、せめて何かしらの救いを見いだそうとあの男は里美の恋人なのだと考えてみた。ホステスが客と恋に落ちることもあるだろうから、その可能性も十分あるだろう。帽子の男は背も高いようだし、お似合いのふたりに見えなくもない。何よりも里美はすごく楽しそうだ。一生懸命に男の顔を見上げ話している姿はいじらしくも可愛らしい。

きつとそうだ……。あんなに楽しそうなのだから間違いない。彼等は恋人同士で、愛しあっているのだ。

そう思い見ていると本当にそういうふうに見えてきて、私は少し気が楽になった。

里美がホステスをやっていたということはショックだったが、彼等が恋人同士ということなら男好きよりはずいぶんましだし、いまは辛いがいつか受け容れることが出来そうである。昨夜小幡さんが見たという、里美と夜の街に消え

ていった男性もこの彼なのだろう。

少し穏やかな気持ちを取り戻し、そう考えていた時、

「あつよく見ると昨日と違うオトコだわ」

小幡さんは私にとって致命的な一言をしごくあつさりと言った。

私は脳天にとどめの一撃があんと打たれたような衝撃にうち震え、倒れ込みそうになるのを必死でこらえていた。昨日と違う男——。それはつまり複数の男性とそういうふうな関係にあるということか……。それは恋人同士などではあるはずもなく……。

ゆめ……。すべてはゆめだ。

呪文のようにそう繰り返しながら、うつむいたままで私は空になった紅茶のカップを見ていた。このままテーブルに突っ伏し、頓死できたならさぞやスッキリとするだろうな、と考えていた。

もう間違いない。小幡さんの言うとおりであった。里美は「男好き」なのだ。あんなに楽しそうな里美の顔は初めて見るような気がした。

「はやくしないと逃げられちゃいますよ」

小幡さんはそうせかすが、私はただ一心にそれを待っていた。どこにでも行ってしまえばいい。どこにでも……。立ち上がるどころか、呼吸する気力もなくなりかけていた。

「里美がだめになっちゃってもいいんですか!？」

小幡さんは叱りつけるような調子で言った。

「……よくな」

かろうじてそれだけは言った。だが、彼女が好きで選んだ道ならそれを止めることなど出来るはずがない。

「それなら行きましよう」

小幡さんに手を強く引つ張られ私はやむなく立ち上がった。

うつむいた顔を上げると、周囲の客達が興味津々といった様子でわれわれのやり取りを見ているのに気づいた。いかかわしい街で言い争う中年と女子大生、彼らはどんなふうにわれわれの関係を推量するのだろう。小幡さんに迷惑がかかる、取り敢えず店を出ようと思った。きつともう里美は遠くへ行っただろう。

支払いを済ませ店を出ると、すぐに小幡さんは里美たちが行ったと思われる方向にズンズンと歩き出した。まだ追跡を諦めていないようだ。その後を私はとぼとぼと意志のない者のようについていく。

男好きの何が悪い、私だって女性が好きだ、アイドルだって大好きだ、などと自分に言い聞かせてもみるのだが、悲しみは一向におさまらない。むしろひどくなる一方だ。

小幡さんが、もともと中心地から外れたところにあつた喫茶店から、さらに遠ざかる方向に歩いていくのでだんだんと人通りはなくなり、静かになっていった。

やがて、おそらく昼間は賑やかなのだろうが、店は軒並み閉まっていて街中にあつても閑散とした地帯に出た。裏通りのせまい場所なので車の通行も全くない。

そのあたりまで来ると小幡さんは足を止めた。里美たちの姿はやはりどこにも見あたらない。さすがに諦めるのだろうかと思つたが、小幡さんはなおも周囲を逡巡している。

「あれ? いませんね」

そんなことも言う。里美たちを見失つてからだいぶ時間が経っていたし、入り組んだ場所だったので発見できないのは当然だと私は思つたが、小幡さんは里美たちが見つからないことに対して意外そうだった。よほど見つけだす自

信があるのか、それとも私の知らない情報を握っているのか、そのどちらかだろうと思われた。

その時、携帯電話の着信音がきこえた。

もちろん私は持ってないから小幡さんののだ。彼女はなおも怪訝そうに周囲を見渡しながら、バッグから電話を取り出した。

「——はい、小幡です。……えーっ！ どうして……、あ、は、はい……、わかりました。……すぐ代わります」

「ぼくに？」

いぶかしく思いながらも私は電話を受け取った。

「石岡君、予想外の事態だ。里美ちゃんが危ない」

いきなり言われた。

「み、御手洗なのか？ どういうことだ」

「すまない、完全に僕の失態だ。一刻を争う。彼女を救えるのは君だけだ。頼む」

「頼むって、里美はどこにいるんだ！？」

「近くにいるはずなんだが、正確な場所は不明だ。なんとか自力で探し出してくれ。君なら出来るはずだ。それと相手は凶器を持っている可能性が高いから、十分注意してくれ」

反駁する間もなく一方的に電話は切れた。なにが何だかわからなくて、携帯電話を耳に押し当てたまま呆然と立ち尽くしていた。

里美が危ないだつて？ 里美と帽子の男があのだビルを出てから、まだせいぜい十分ほどしか経ってないはずだ。それなのに危険が迫っているだつて？

一刻を争うとも言っていたな……。

「大変だつ！ 里美ちゃんが危ない！」

呆然としていた私の頭が急激にフル回転をはじめた。

はやく里美を見つけださなければ、里美の身に何かが起こる前にはやく。

だが、この夜の街で、どうやって彼女の居場所を知る？

闇雲に走り出すか？ 里美の名を叫びながら。だが、全然見当違いの方向だったらどうする？ それに里美が応えられる状況じゃなかったら？ 警察に連絡するか？ いやそんな悠長なことをやっている時間はない。

「里美になにかあったんですか……？」

小幡さんが不安そうな様子で訊くが、私は里美のことで頭がいっぱいでそれに答えられる状態ではなかった。

「そうだ！ 小幡さん。君の後輩はもう尾行してないのか！？ してるなら連絡すれば居場所がわかる！」

私は思いつきを叫んだ。小幡さんの両肩をつかんで激しく揺さぶり、いつの間にか彼女に詰め寄るような形になっていた。

「——び、尾行なんかしてないですよ。だつてあれ嘘なんでもん！」

とつぜん小幡さんは泣き出しそうな声で叫ぶように言った。

「っそーっ！」

どういふことだ——。だが、考えている暇はない。

御手洗の切迫した声が甦る。御手洗があれば追いつめられているのだ。何が起こったのかはわからないがよほどの非常事態が発生したことは間違いない。

一刻もはやく里美の位置を特定する方法を見つけださねば……。

私はぐるぐると路上をうろつき廻りながら必死で思考した。すると頭の中にパツとある言葉が浮かんだ。最初はな

ぜその言葉が浮かんだのか、自分でもサッパリわからなかった。だが、落ち着いて考えるとそれは重要な意味をもつ言葉だったのだ。

「そうか！ 携帯電話だ！ 小幡さん、里美の番号知ってるね？」

私はその言葉を叫んだ。まるで脳が私に黙って必要な情報を検索してくれたように思った。

「は、はこ」

「すぐに電話して！ 着信音で居場所がわかるかもしれないっ」

「わかりました」

小幡さんは慌てて携帯電話のディスプレイに向かった。

もしも里美が車の中や建物に連れ込まれていたら、いくら携帯が音をさせようが聞こえるはずはない。だが、何となく感じていた。里美はすぐ近くにいます。そうだ、御手洗も言っていたではないか、里美は近くにいます。直感が確信に変わった。

「つながってますー！」

小幡さんが叫ぶ。

私は全身の神経という神経を耳という器官に総動員して、ただひとつの音を探した。

思い出す、最後に里美と会ったときのこと、「これ羨ましいでしょー」そう言って聞かせてくれたあの着信メロディ、モーニング娘。の「恋愛レポリッシュン21」。

「どこの、里美」

「シツ黙って！ ……聞こえる……聞こえるぞ！ 近い！ —あっちだ！」

私は叫びと共に駆け出していた。

里美の着信メロディを確かに聞いた。やはり遠くではないすぐ近くだ。おそらく目の前約十メートル先の角を曲がればすぐだ。

路面を蹴りつけるその一足ごとがもどかしく、苛立ちを感じた。

メロディは聞こえ続けている。

携帯電話が角を曲がったすぐ先にあることは確実だった。

…そして、角を曲がり、私は眼前に悪夢的光景を見た。

里美は路上に横たわっていた。数メートル先で私の方にだらりと両足を向け、仰向けに倒れている。すぐそばに転がる里美の携帯電話は場違いに綺麗なメロディを奏で、アンテナの部分はまるで彼女の危機を報せるようにしきりに点滅を繰り返している。里美はぐったりした体を路面に預け、首を力無く曲げている。里美の額からは血液がひとすじ、つうと流れていた…。

その里美を見下ろすようにして、こちらに背を向けた長身の男が立ちつくしている。それが先ほど里美と共にビルを出てきた帽子の男だと気づくのにそう時間はかからなかった。

鈍い街灯の下、御手洗の言ったとおり男は手にぶらりと凶器と思われるものを下げていた。うり様のその形状はブラックジャックと呼ばれる革袋に砂をつめた殴打用の武器に似ている。昔の外国映画などで、たいていチンピラが持っていたあれだ。砂といえどその威力は侮れず、人を殴り殺すことも充分可能だそう。しかも使用しても音をほとんどたてないし、持ち運びも容易い。こんな街中で使用するにはまさにうってつけの凶器。

この男が、それを使って里美を——。

「この野郎！」

と自分のものでない声が、私の喉を使って叫んだ。

久しく、いや永遠に失われてしまっていたかもしれない熱くほとぼしる感覚が、私の全身を撃ち抜き、噴出していった――。

「あれ？もう来たの？」

長身の男が振り向き、おどけた調子で言った。そして英国紳士のような優雅な手つきで帽子を脱いでみせた。その顔――。いままさに殴り抜けようとした私の激情を急激に凍結させ、雲散霧消させた、その顔――。

信じられない、そんなことがあってもいいのか。

「御手洗！」

「あはは、石岡君驚いた？」

いたずらっぽい表情を満面に浮かべ、あっけらかんと御手洗は言った。

まさか――、御手洗がやったのか？ その手に下げた凶悪な武器で里美を！ 混乱しきった私は横たわる里美の体と御手洗の顔を交互に見つめる。

すると私の目の前で、額から血をたらした里美の上半身がゾンビのごとくムクツと起きあがり、

「先生、本当にごめんなさい」

とペコリと頭を下げた。

「やっぱり、やりすぎですよー、御手洗さん」

さっぱりわけがわからない。私は相変わらず血濡れた里美の顔をまじまじと見つめる。里美は申し訳なさそうな顔をしている。

私は里美と御手洗に一杯食わされたのか？ 小幡さんも含めて全員が私を騙していたのか？ しかしその里美の血は？ 御手洗の凶器は？ それは一体何なのだ。

そこへ小幡さんが息を切らしながら走ってやって来た。

「あつ、里美！ あんた何ともないの？」

里美を見てひどく驚いている。演技とはとても思えない表情。とすると小幡さんは私を騙した一味のひとりではないということになるのか。ということは里美はやはり男好きということになるのか……。いやビルからは御手洗と出てきたのだ。とすると御手洗が里美の恋人……？ わけがわからない。なんだか体が疲れていて頭がうまく働かなかつた。

「うん、私は大丈夫なだけけど……」

里美は心配そうに私を見ていた。

「でも、そのおでこの血は……？」

小幡さんが里美に訊いた。

そうだ。その血はどうしたのだ。痛くないのか。たくさん出てるぞ。

「これは……」

里美は御手洗の方に視線を送った。その視線の先を追った私はふたたびあ然とさせられ、そしてがつくりと地面に膝を落とした。

里美が見ていたもの、それは一般の家庭でよく見られるあのケチャップのプラスチック容器だった。御手洗はその首の部分を掴んで手に下げている。そういうふうにして持てばブラックジャックに形が似てなくもない。そうなのだ。私は単なるケチャップの容器を里美に怪我をさせた凶器だと思いついていたのだ。暗がりだったとはいえ、見間違えにもほどがある。

そして里美の額は言うまでもなくケチャップの血のりであった。いよいよ老眼鏡の世話になるときが来たよう

である。

「さあ、石岡君。余興は終わりだ。アパートに帰ろう」

御手洗が私を立ち上げながら、楽しげに言った。

なにが余興だ！ と私は頭にきていたが、全然事態が飲み込めなかつたせいで、里美が無事で、しかも男好きじゃなさそうなことにホッとしてしまったせいで、怒るタイミングを逃し、黙って御手洗と共に歩き出した。

道すがら里美と小幡さんにこのたちの悪いドッキリのからくりを聞いた。

今朝、里美が私宛にかけた電話をなぜか早起きしていた（時差のせいだと思われる）御手洗が取ったのが、そもそもの発端である。

最近私に元気がないことを心配していた里美が、それを御手洗に相談し、そこで里美が、何か先生を元気づける計画を考えるから御手洗さんも協力してつ、と頼んだそうである。

そこでなぜ御手洗が里美に協力を約束したのかはよくわからない。普段の御手洗なら絶対に引き受けるとは思えないのだが……。ひよっとしたら、昨夜レストランで私のことを気遣ったばかりだったから、引き受けざるを得なかつたのかもしれない。ただその時点では御手洗が乗り気でなかつたのは確かなようである。

そして里美がその友人小幡さんと考え出した計画が、「里美が男好き！？」計画である。当初の筋書きはこうだ。

まず小幡さんが、里美の男好き疑惑により、私を部屋から連れ出し、「M」の見える喫茶店に待機させる。

一方、電話で待ち合わせた場所にて落ち合った御手洗と里美は、「M」のあるビルの裏口からこっそり入り、店からの客とホステスを装い出てくる。

そして私と小幡さんがそのふたりを尾行していると、御手洗が里美に暴力をふるいます（演技）、そこで私が里美

を救出する、すると、私に元気がつく、というかなり無理のある計画だ。おそらくこれは私を元気づけるための計画から、「御手洗さんに逢いたい（はあと）」計画が変わったせいだと思われる。そのさい特に小幡さんの影響力が強かったと思われるのだが……。

とにかく計画は実行に移された。

だが、ここで問題が起こった。もちろん御手洗である。

最初はうっかり引き受けたせいもあり、全然乗り気じゃなかった御手洗だが、計画が進むにつれ、段々興が乗ってきて（腕がちぎれたと昔私を騙したこともある）、つまり楽しくなってきた、「もつと本格的にやろう」と里美に持ちかけたようだ。

血のり用のケチャップを買ったり、小幡さんに相談もせずに、携帯電話で里美の危機を私に告げたりしたのは、すべてかれの悪のりである。

説明を聞いた後で、せめて御手洗に一言ぐらい文句をいってやろうと思ったが、かれはいつの間にかひとりで行ってしまったらしく姿が見えなかった。

「でも男好きでなくて良かった……」

私は思わず声に出して呟いてしまう。まずそのことに安心したせいで、里美と小幡さんに対する怒りも全然湧いてこない。

「やっぱり私が男好きだといやですかー？」

私の呟きを耳ざとく聞きつけた里美が言った。

「えっそれはそうだよ」

「じゃあホステスはー？」

何が楽しいのか目を輝かせて私に訊く。

「それも……いやだ」

「どうしてですか？ 綺麗だし格好いいじゃないですかー。お金だつてたくさんもらえるし。この服だつてお金持ちの家のコから借りたんですよ。私もこんな洋服欲しいなー」

すねたふうにそう言つて私の目をじつと見た。

私は思わずどぎまぎしてしまう。高級な洋服に身を包み、化粧も派手めにした里美は完全に成熟した大人の女性を思わせ、近寄りがたいほど綺麗だったからだ。この様子なら、本当にホステスになつても成功は間違いないと思われた。

「……でも……いやだ」

「こら里美、あんまり先生を困らせちゃダメでしょ」

小幡さんが叱った。

「はーっ」

里美は元氣よく手を上げて無邪気に返事をする。どうもいつも見ている里美と違って少々子供っぽい様子だ。そばに小幡さんがいるせいだろうか。

「私がちやんと里美を見張ってますから、心配しないで下さいね。石岡先生」

小幡さんは頼もしい言葉を私に言ってくれた。こういった保護者的な態度が里美を安心させているのかもしれない。

「あ、そう言えば君たち喧嘩してるんじゃないか？」

私は言った。「パロサイ・ホテル」の事件の時、確かに里美は言っていた。小幡さんに男好きと誤解されて避けてられている。あれからまだ三ヶ月ぐらいいしか経ってない。

「やだなーセンサーそんなのとっくに仲直りしてますよー」
 笑いながら里美はぼしっと私の肩をたたいた。

「あ、そうなんだ。ふうん」

女同士の友情というものがどういふものか知らないが、そんなものかなとも思う。だが、この仲直りのおかげでひどい目にあつた。

「それにしても小幡さんは演技上手いんだね、すっかり騙されちゃったよ」

私は言った。訪ねてきた時の深刻そうな様子などは真に迫っていて、とても演技とは思えなかった。たいしたものだと素直に思う。

「ごめんさい、石岡先生」

「小幡さんはなにやらせても凄いです。なんだってセリトスの御手洗潔って言われてるぐらいですからね」

里美が隣で言った。ちよつと自分も得意そうなのはやはり小幡さんを尊敬しているからだろう。

「でも、石岡先生のおの剣幕にはびっくりして、私泣きそうだった」

小幡さんが言った。

「え、あのとって？」

「忘れたんですか、私の肩を揺さぶつて、後輩はもう尾行してないのかって大声で……」

「ああ、あのこと……」

思い出すだけで顔が赤くなる。とにかく必死だった。

小幡さんが思わず計画をばらしてしまふぐらいだから、きつとすぐ追いつめられた顔をしていたのだろう。里美を悲しい目にあわせるぐらいなら自分などどうなつても構わない、あの時は本当にそう思った。

「……あ、そうだ、里美ちゃん、ぼく宛の電話つてあれ何の用件だったの？」

話題を逸らしたくて私は言った。だが、気になっていたことでもある。

「電話？」

「朝かけてきてくれたんだよね」

そう言うとき里美は小幡さんの顔をちらつと一瞬見てから、

「……べつに大した用事じゃないんです、ただ元氣かなーって」
 と言った。

アパートの前まで来ると御手洗が待つていた。ポケットに手を入れたまま突っ立っていて、ゆるやかな秋の風にただ吹かれていた。風が心地良いのか、かれは嬉しそうな微笑みを私に向けた。

「それじゃ私達帰ります」

私の背後で小幡さんが言った。

「あっ気づかなかった。ごめんね。ここまでつき合わせちゃって」

私は言った。道中ずっと説明を聞いていたので気が回らなかった。小幡さんの家はどこか知らないが里美のマンションはだいぶ方向が違う。

「全然大丈夫です。それじゃ失礼します」

ふたりは御手洗と私にべこりと頭を下げると意外なほどあっさり帰っていった。特に小幡さんなどは御手洗を質問責めにしかねないと内心心配していたのだが。

「さあ、行こう！」

御手洗は機嫌良く言うとエレベーターに向かって歩き出した。

その様子を見てるとつい数時間前まで鬱状態だったのが嘘みたいだった。

あ、そうか、あれは嘘だったのか、合点がいった。

里美たちの計画を私に悟らせないために鬱のふりをしていただろう。すっかり騙された。演技がうまいのは小幡さんばかりではない。

「あの鬱病は芝居だったのか」

五階に到着し、部屋のドアを開きながら御手洗に言った。照明はきちんと消してから出かけたので、室内はもちろん真っ暗だ。鍵を開けた私が先頭で玄関に入り、蛍光灯のスイッチを手探りする。

だが、返ってきた御手洗の言葉は意外なものだった。

「芝居何かじゃない。自分の生まれた日も忘れて、コンビニエンスストアの冷えた弁当を食べる。そんな青白い顔の友人を見れば、誰だっであんなふうになるさ……」

「え？」

言いながら私は半ば習慣化した行動で室内灯のスイッチを入れた。

「ハッピーバースデー！ 石岡せんせい！」

灯りがともると同時に、はじけるような黄色い声が耳に押し寄せてきて私はびっくり仰天した。すぐ後ろにたくさん人の人の気配がある。

楽園——。

振り返った私の脳裏をそんな言葉が駆けめぐった。

「ほら、君の好きな若い女性がたくさんだよ」

皮肉っぽく御手洗が言う。だが、室内の光景に完全に目を奪われてしまっていた私の耳には届かない。

まるで天使の国に迷い込んでしまったような錯覚を憶えた。

あの陰気だった私の部屋は、折り紙やリボン、風船などで色鮮やかに飾り付けされ、見違えるほどに明るく華やかになっている。テーブルには手作りと思われる大きなケーキが置かれ、その上にはカラフルな口ウソクが何本もたてられている。そして何よりも私が仰天し心を揺さぶられた存在、それはこの部屋を埋め尽くさんばかりにいた大勢の若い女性だった。

「いたい……」

私は言葉を失った。女性たちはみな笑顔でうろたえる私を見つめている。みな二十歳ぐらいいに見える。その目がじつと私に注がれている。女子大で講演をしたならこんなふうだろうか。どきまぎと落ち着かなくて私はあわてて目をふせた。

「ほとんどがミス研の子なんですよ」

声がした。見ると帰ったはずの小幡さんがいつの間にかすぐ後ろにいた。里美も一緒だ。

「石岡先生の誕生日会やりたいって言ったら集まってくれたんです」

小幡さんは続けた。

そうだったのだ。今日は十月十日、昨日の十月九日は私の誕生日だった。完全に忘れていた。

「先生ごめんなさい。昨日、私お祝い言うのすっかり忘れてたんです。いろいろ忙しくて、あ、言い訳ですーごめんなさい」

里美が言った。

「謝らなくていいよ、ぼくだって忘れてたんだから」

私は夢見心地のまま言った。自分の身にこんなことが起こるなんて信じられない、そんな気持ちだった。

「今朝、それで謝りとお祝いの電話を先生にしたんです。そしたら御手洗さんがでて……」

その一本の電話から今回の騒動が始まった。それが私への誕生日祝いの電話だったとは夢にも思わなかった。

あっ、ととつぜん思った。

御手洗は私の誕生日を祝いにわざわざ北欧から来てくれたのか！

そのことに気づいた。

連絡もせずいきなり現れたのも私を驚かせるビックリパーティーのつもりだったのだろう。それなのに私は全然気づかなかった。

「僕がなぜ、ここに帰ってきたかわかるかい？」

御手洗は私にそのことを気づいて欲しくてレストランでそう尋ねていたのに、私は思い出すどころか憎まれ口をたたいてしまった。

だから御手洗は結局帰国の理由を言い出せずに……。

御手洗に悪いと思うと同時に胸にじーんと暖かい思いがあふれてきて、いっぱいになった。

そう言えば昨夜の御手洗はへんに優しかった。あれにはこんな意味があったのか。

礼を言おうとあわてて振り返ったが御手洗の姿はすでになかった。大勢の女性に恐れをなしたのだろうか。

女性たち全員にいきわたるだけの椅子はもちろんないので、立食パーティのような雰囲気です。楽しい時間を過ごした。いぜん御手洗は姿をくらましたままだったので男は私ひとりだったが、里美や他の女性たちも話題などには気がつかなくて、ウォールフラワーにはならずすんだ。

この部屋の飾り付けは私と小幡さんが部屋を出てすぐに始まったそう。部屋には御手洗が持っている鍵を借りて入ったらしい。こういう段取りはすべて小幡さんが指示したそう。

帰り道で説明を聞いたときは、御手洗に会いたいがために用意した計画かと思ったが、私をアパートから連れ出してその隙にパーティの準備をすることに重点が置かれていたらしい。

しかしなかなかうまくいかなかった。「里美が男好き!？」計画ならば、御手洗に会うことも出来るし、時間の調整もきく、もちろん私を部屋から連れ出すことだって出来る。それにも計画が私に発覚しても誕生日会そのものには影響がないという点が良くできているように感じる。

女性たちには、勝手に部屋に上がり込んですみません、とも言われたが同居人の御手洗が〇して居るのだから私としては何も言うことはない。それにこんなに盛大に誕生日を祝ってもらったのは初めてだったからとにかく嬉しかった。

開始時刻も遅かったこともあり、一時間そこそでお開きとなった。少々残念ではあるが、女性たちをあまり夜遅くまでつき合わせるわけにもいかなかった。

それに一瞬ではあるが御手洗の姿を見ることが出来たので、ほとんどの女性はいへん満足したようだった。

「やだっ御手洗さん帰ってくるまで絶対待つもん」

という強情な女性もいるにはいたが、小幡さんが「でも、ふたりの夜を邪魔しちゃ悪いよ」というと妙に納得して帰っていった。私は複雑な気分である。

それにしても今回の里美の役割は他の女性たちから見たいへんに羨ましい位置なのではないだろうか。ミス研での里美の立場がますます悪くならないことを私はただ祈るばかりだ。

女性たちがみな帰り、部屋がすっかりがらんとしてしまったと思っていたら、御手洗がひょっこりと現れた。いったいどうやって彼女たちの帰宅を知ったのだろうか、相変わらず謎の多い男である。

「どう? 楽しかったかい」

ソファにどさつと腰掛けると御手洗は言った

「……うん、まあね」

素直に喜ぶのが何となく気恥ずかしく控えめに言った。

「それはなによりだ。君はもつと楽しむことを覚えたほうがいい。あまり陰気な顔ばかりしているとガールフレンドに逃げられるぜ」

「それって里美ちゃんのこと?」

「誰でもいいよ。だが、彼女は君のことを本当に心配している様子だったな……」

それは嬉しかった。

本当に里美が男好きでなくて良かった。あらためてそう思う。

「わざわざぼくの誕生日のために来てくれたのに気づかなくてごめん」

私は先ほど言いそびれていた礼をするつもりだった。パーティが始まる直前に御手洗の言った言葉がまだ耳に残っている。

心配かけたことなく御手洗との国際電話では大きなことばかり言っていたから（女子大生の友人がたくさんいるとか）、昨夜、御手洗は私の家で誕生パーティでも行われていると思ってる来たのだろう。それなのに私が一人ぼつとコンビニ弁当を食べていたものだからさぞかしショックだったのだろう。

そして、それがあんな鬱状態を引き起こすきっかけになってしまった。

いま考えれば、かれが「精神的な時差惚け」と言った意味もなんとなくわかる。

御手洗にとってはちよつと外国に旅行に行っていたような感覚で帰国してみると、私が部屋で老人じみて無気力になつていたからそんなふうと言つたのだ。

雨がどうか言つて時間の非情さについて憂いていたのも同じような理由だろう。つまり原因はすべて私だったのだ。

「何を勘違いしてるんだい、石岡君」

御手洗はびしゃりと言つた。

「ほんのついでだよ。明日は大切な友人と会う約束があつてね。まあ、日本の秋は嫌いじゃないから、すこし早めに帰ってきたんだ。誤解させたのなら悪かつたね」

「じゃあ、あの鬱病はなんなんだい？ ぼくのせいじゃないのかい？」

「当たり前さ。疲れただよ、君。ここ数年はろくに休みも取らず、研究に没頭していたからね。いろいろと内省することも時には必要だよ」

この調子だとさつきのセリフも「そんなことを言つた憶えはない」と一蹴されてしまいそうである。

御手洗が自分がしたことに對して感謝を受けたがらない男であることは十分承知していたが、たまには素直に受けてくれてもいいのではないか、と思う。なんとなくさびしい。

私がすこししよげていると、急に何かを思い出したように御手洗がニヤニヤ笑いはじめた。

「いや、それにしても、『この野郎！』、あれはよかつたね、石岡君」

そんなことを言つて私の肩をポンとたたく。

「君のあんな澆刺とした声を聞くのは、二十年振りぐらいいかな」

私はまた顔を赤らめてしまう。

御手洗は、里美を襲つた暴漢に私が叫んだ言葉をからかっているのだ。暴漢と言つても御手洗だったが……。

「もうそのことは言わないでくれよ」

私は恥ずかしくなつて言つた。

「この野郎！」 語気荒くそう叫んだあの時、一番驚いていたのはきつと私だろう。

無気力に日々を見送るうちにそのような激しい感情はとつと失われてしまったと感じていたから。

だが、それはまだ死んでいなかったのだ。

私の中でただ眠っていただけなのだ。私はそのことに気づくことが出来た。あの激しく燃えるような若い感情、あれが私の胸の内に存在するのなら、まだどんなことでもやれる、そんな気さえする。

それを教えてくれた里美や小幡さん、そして何よりも御手洗には感謝せねばなるまい。

里美の危機が嘘だと知ったときはひどいはずらだと思つたが、いま思えばあれも無気力な私に喝を入れるために御手洗がやったことなのだろう。

相変わらず辛辣で厳しい教師だが、いつもかれは私に大事な何かを思い出させてくれる。

それがかれ流の優しさなのだ。

「フフ、まったく君ほど騙しがいのあるひとは世界中探してもいないね」

御手洗はまだニヤついている。やがて思い出し笑いが止まらなくなったのか「ククク」という忍び笑いさえはじめた。そしてさらには堪えきれないといった様子で腹を抱えて「あはは」と笑いはじめた。

それを見ていると、ひよつとしたら全部私の勘違いで、単に意地が悪いだけなのかもしれない……、とも思った。だが、それでもいい。

少なくとも私を心配してくれて誕生日会まで開いてくれる人達がいる、友人がいる、それがわかった。

私はひとりぼっちじゃない。それを実感することが出来た。

それだけで充分だ。

最悪な一日になるという私の予感は見事回避された。

小幡さんや里美、特に御手洗にさんざん踊らされた一日だったが、最後の最後には踊りだしたいほど幸福な一夜だった。

(おしまい)